

小学生の教師認知に関する研究

佐藤 公代

(教育心理学教室)

(平成14年5月16日受理)

Study on Teacher's Cognition of the Schoolchild

Kimiyo SATOU

(問題と目的)

佐藤(2002)は、「大学生の教師認知に関する研究」において、以下の4点を明らかにした。つまり、

- (1) 協調性の高い学生は低い学生よりも、指示や助言といった情報度の高い教師の態度を求める。
- (2) 外向性の高い学生は低い学生よりも、相談や激励といったそれほど情報度の高くない教師の態度を求める。
- (3) 協調性、外向性ともに高い学生は最も多く教師から情報を受け取るのに対し、両方とも低い学生は教師から受け取る情報が少ない。
- (4) 男性よりも女性の方が受容的な教師に好感を持つ。

今回は、以上の結果をふまえて、小学生で行ってみる。

仮説は次の通りである。

- (1) 協調性の高い子どもは、低い子どもより、指示や助言といった情報度の高い教師の態度を求めるだろう。
- (2) 外向性の高い子どもは低い子どもより、相談や激励といったそれほど情報度の高くない教師の態度を求めるだろう。
- (3) 協調性・外向性ともに高い子どもは教師から最も多く情報を受け取るのに対し、両方とも低い子どもは教師から受け取る情報が少ないであろう。
- (4) 男子より女子の方が受容的な教師に好感を持つだろう。

(方 法)

1) 対象者：B 小学校 5 年生 24 名（男子 9 名，女子 15 名），6 年生 29 名（男子 15 名，女子 14 名），計 53 名。なお，先行研究でも，今回の調査でも 5，6 年生の間に有意差がみられないので，人数の関係上，高学年としてまとめ分析することにする。

2) 調査期日：2000 年 10 月

3) 調査項目：イ，Big Five 尺度：和田（1996）を参考に「協調性」と「外向性」の 2 つの性格特性尺度を用いる。各性格特性について 7 項目ずつ計 14 項目をそれぞれ 3 件法で評定し，性格特性ごとの合計得点を算出する（得点範囲は 7～21）。この 2 つの性格特性得点の相対的高低により 4 群に分類する。つまり，協調性の優位な群（以下 Ae 群と略），外向性の優位な群（以下 aE 群と略），両志向性ともに平均点より高い者は両志向性とも高い群（以下 AE 群と略），低い者は両志向性とも低い群（以下 ae 群と略）である。

Table 1 に小学生の性格特性ごとの人数を示す。

ロ，佐藤，篠原（1976）による教師の PM 機能測定項目：教師の P 機能（目標達成機能 Performance Function）に関する 9 つの質問項目と M 機能（集団維持機能 Maintenance Function）に関する 8 つの質問項目の計 17 問。それぞれ 2 件法で評定し，各機能ごとの合計得点を算出する（得点範囲は P 機能：0～9，M 機能：0～8）。

ハ，教師の指導態度に関する認知の測定：岸田（1967）を参考に，8 つの刺激図版を河野と筆者で作成する。自己防衛，自己主張，救助，親和の 4 つの欲求にもとづき，それぞれの欲求に対する，生活場面と学習場面の 2 つの場面を設定する。それぞれの図版には，教師と数名の児童が描かれており，児童が教師に対して何らかの欲求を示していることが児童の会話として書かれている。一方，教師の会話は空白になっており，ここに児童の欲求に対する教師

Table 1 小学生の性格特性ごとの人数

	ae	aE	Ae	AE	計
男子	4	3	8	9	24
女子	10	4	7	8	29
計	14	7	15	17	53

Table 2 教師認知に関する分類カテゴリー

分類	反 応 内 容
受 容	①単純な受容・共感（児童の要求に何の統制も加えずそのまま容認し，全面的に受容するもの） ②激励・誉める（児童の要求に何の統制も加えずそのまま容認し，その態度に対して激励したり誉めたりするもの） ③相談（要求に対する対応を保留し，質問などによって事態を明瞭にしようとするもの） ④提案（児童の要求を受容しながら，指導・助言を与えるもの）
支 配	⑤指示（要求に対して，明確な説明や具体的な指示を与えるもの） ⑥強制（要求に対して指示を与えるが，内容が一方的で拒否的なもの） ⑦非難（児童の要求，考えを非難するもの） ⑧処罰（児童の要求に対して，何らかの処罰を与えるもの）
（教育）放棄	⑨皮肉（児童の要求に関係なく，皮肉を言うもの） ⑩放任（児童の要求に関係なく，児童を放任するもの） ⑪拒否（児童の要求を無条件に拒否するもの） ⑫その他（驚き・困惑・意味不明等）

の反応を自由に推測し、記入するように求められているものである。

教師認知に関する児童の反応を分類するため、中山（1989）による教師の指導態度認知に関する分類カテゴリーと岸田（1967）による教師の指導発言の生徒による認知の定義を参考に分類カテゴリーを Table 2 に示す。12のカテゴリーへの反応頻度を8場面全体で合計し得点化する（範囲は各々0～8）。この他、教師をどの程度説明的・情報的と認知しているかをより直接的にとらえるため、各反応に含まれる情報・説明の程度（以下情報度と呼ぶ）について、それぞれ3段階、つまり、「ごく単純な受け入れ・拒否」（0点）、「きわめて具体的な指示、明確な理由の叙述、新しい提案」（2点）、それらの中間である「質問や指示・助言・評価的発言」（1点）と評定する。この情報度についても8場面全体での合計得点が算出される（範囲0～16）。

4) 手続き：用紙に印刷された教示文を各担任教師に説明していただいた。教示は Table 3 の通りである。

Table 3 教示

① “あなたの性格について質問します。次の1から10の質問で、あなたの性格にあてはまっていることには『はい』を、あてはまっていないことには『いいえ』、はいでもいいえでもないときには、『どちらでもない』を○でかこんでください。”
② “下の絵は、子どもたちが先生に、なにかを言っている場面です。先生は、なんと答えていると思いますか。あなたが思ったことを、先生のふきだしの中に書いてみてください。”
③ “あなたの好きな先生を1人思いうかべてください。あなたの好きな先生は、次の1から17の質問に書いてあることをされますか？『はい』か『いいえ』を○でかこんでください。”

（結果と考察）

Fig. 1～3 に各カテゴリーへの反応頻度について、4つの性格特性群の平均値のグラフ、Fig. 4～6 に各カテゴリーへの反応頻度について、男女の平均値のグラフ、を示す。

性格特性（4）×各カテゴリーへの反応頻度（12）の一元配置分散分析のあと、性格特性に有意差が認められた場合、Tukey HSD 法による群間の対比較を行う。また、性別（2）×各カテゴリーへの反応頻度（12）のt検定を行う。

Fig. 1～6 から言えることは、次の通りである。

「単純な受容・共感」「相談」について、性差に0.1%水準で有意差が認められる（それぞれ、 $t(51)=3.99, P<.001$, $t(51)=-3.63, P<.001$ ）。

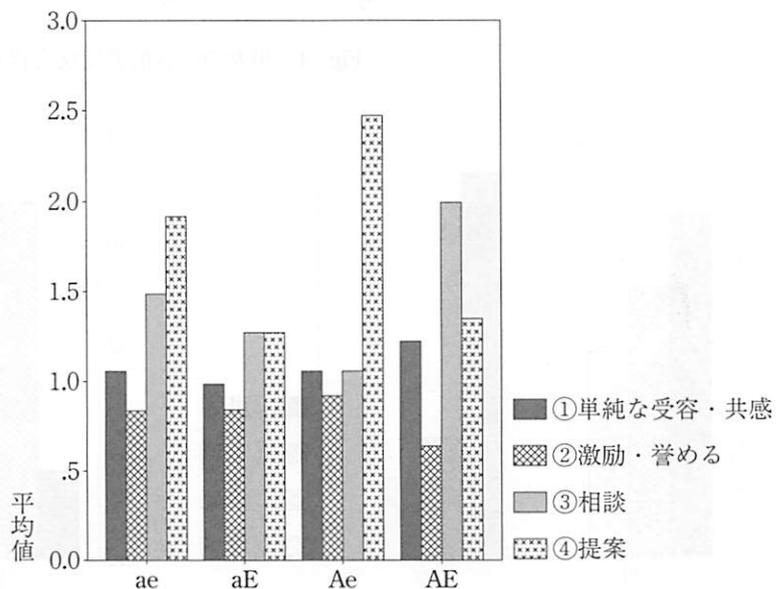


Fig. 1 各性格特性群の受容的態度反応得点

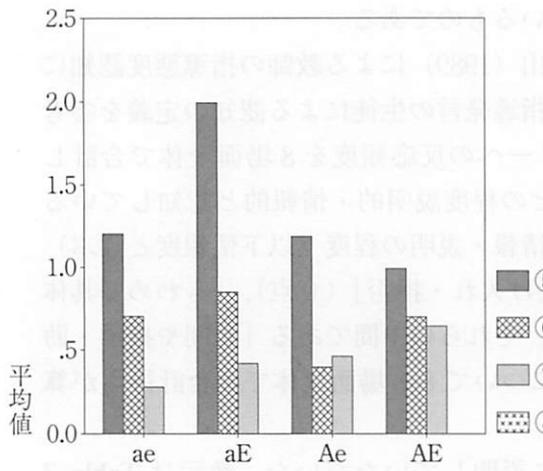


Fig. 2 各性格特性群の支配的態反応得点

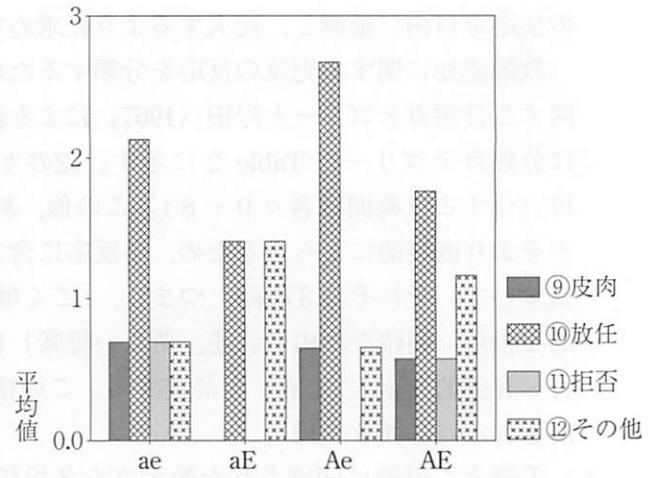


Fig. 3 各性格特性群の放棄的態反応得点

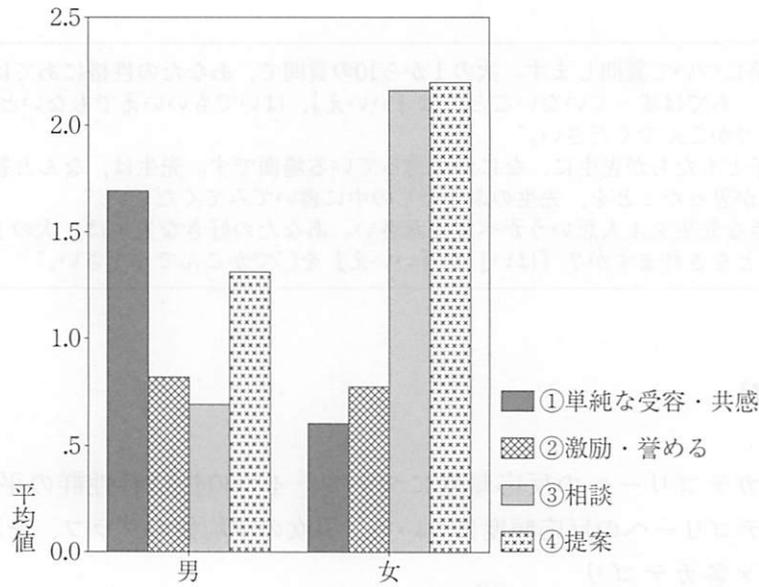


Fig. 4 男女の受容的態反応得点

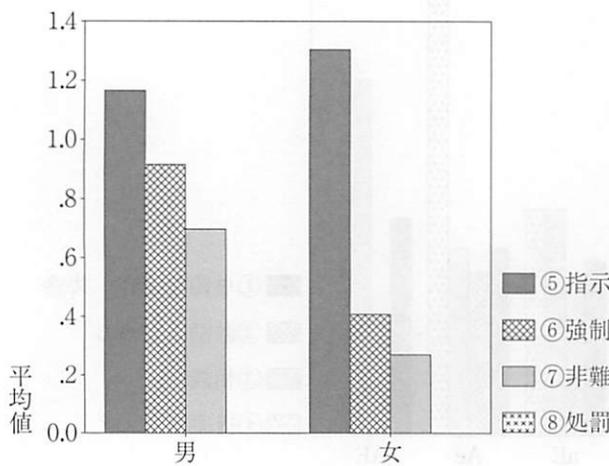


Fig. 5 男女の支配的態反応得点

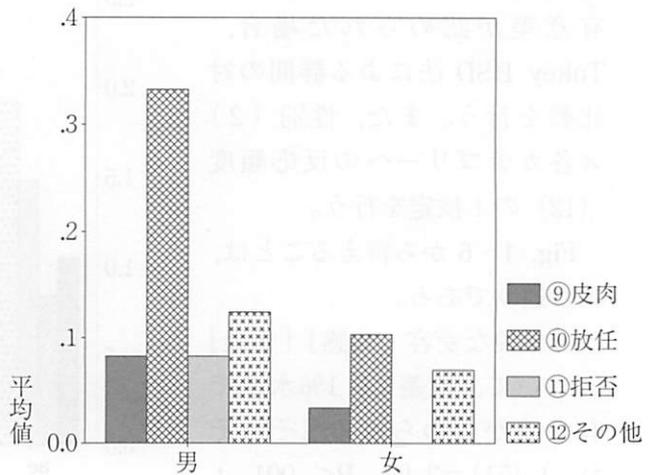


Fig. 6 男女の放棄的態反応得点

「提案・助言」について、性格特性群間に有意な傾向が認められる ($F(3, 49) = 2.61, P < .10$)。対比較によれば、Ae 群と AE 群との間に有意な傾向が認められる。そこで、外向性の高い群 (E 群の平均1.33) と低い群 (e 群の平均2.21) とで「提案」への反応頻度及び性差の t 検定の結果、5%水準で有意差が認められる (それぞれ、 $t(51) = 2.56, P < .05, t(51) = -2.56, p < .05$)。「指示」については、aE 群の平均値が最も高く、 $.10 < P < .20$ と有意差は認められないが、若干の傾向が認められる ($F(3, 49) = 1.93$)。「強制」「非難」について、性差において5%水準で有意差 (それぞれ、 $t(51) = 2.27, P < .05, t(51) = 2.25, P < .05$)、「放任」について、有意な傾向 ($t(51) = 1.88, P < .10$) が認められる。情報度について、AE 群 < aE 群 < Ae 群 < ae 群の順に多くの情報を受け取り、女子の方が男子よりも情報度が高い ($t(51) = -3.95, P < .001$)。

群ごとの分析結果を示す。AE 群について、「単純な受容・共感」「相談」の反応が多く、「提案・助言」「指示」の反応が少なく、教師から受け取っている情報も最も少ない。Ae 群について、「提案・助言」が多く、「強制」が少ないが、情報度は高い方である。aE 群について、「指示」の反応が多く、「提案・助言」の反応が少なく、情報度はそれほど高くない。ae 群について、「相談」「提案・助言」の反応が多く、「非難」が少ない、情報度は1番高い。

男女別分析結果について、男子は「単純な受容・共感」「強制」「非難」、女子は「相談」「提案・助言」の反応が多く、教師から受け取っている情報は、女子の方が多い。

AE、Ae の2群 (A 群) と aE、ae の2群 (a 群) の比較から協調性の影響を調べる。両群とも「提案・助言」の反応が最も多く、A 群は「相談」、a 群は「指示」の反応が多い。教師からの「提案・助言」といった、いわば情報度の高い反応に関して、両群とも反応が多いが、その他に、A 群は「相談」という形で、教師からの情報も必要としていながらも教師の意見だけでなく、自分の意見も取り入れていきたいという考えがある。一方、a 群は「指示」という形で、教師からより多くの情報を受け取っている。よって、仮説 (1) は支持されない。

AE、aE の2群 (E 群) と Ae、ae の2群 (e 群) の比較から外向性の影響について、両群とも受容的反応が多い。その中でも、E 群は「相談」、e 群は「提案・助言」の反応が最も多い。外向性の高い群は、教師と一緒に話し合いによって物事を決定したいという考えがあり、外向性の低い群は、教師からのより具体的な情報を求めている。よって、仮説 (2) は支持される。

情報度について、AE < aE < Ae < ae の順に多くなっている。協調性・外向性ともに高い子どもは、教師の意見を参考にしながらも、学校生活の中での様々な問題を自分で解決していくことを理想とし、逆に、協調性・外向性ともに低い子どもは、何か問題が起こった際には、教師からの具体的な意見を聞き、解決して行こうとする傾向にある。PM 機能を見ても、AE 群は他の3群と比較しても P、M 機能ともに反応が少ない。よって、仮説 (3) は支持されない。

男子は「単純な受容・共感」の反応が最も多く、ついで「提案・助言」であり、「強制」「非難」も多い。女子は「相談」の反応が最も多く、「提案・助言」と続いており、情報度も多い。男子は女子よりも非情動的な態度に反応が多く、主に教師の単純な受容といった情緒的關係に焦点を当て、情動的側面への関心は低い。女子は、情報度の高い教師の態度に反応が多く、教師の意見をより多く取り入れようとする傾向にある。よって、仮説 (4) は支持される。

今後、低学年、中学年との認知の比較研究も必要となるであろう。

(引用文献)

- 岸田元美 1967 児童・生徒の教師認知に関する測定論的研究(1) -とくに教育的指導態度に対する認知について- 徳島大学学芸紀要 第15巻 37-64
- 中山勘次郎 1989 児童の動機付け志向性と教師の指導態度の認知 教育心理学研究 第37巻 第3号 79-85
- 佐藤公代 1993 児童の対人葛藤場面の解決法に関する研究 愛媛大学教育実践研究指導センター紀要 第11号 37-54
- 佐藤公代 2002 大学生の教師認知に関する研究 愛媛大学教育学部紀要 第1部教育科学 第48巻 第2号 47-55
- 佐藤静一, 篠原弘章 1976 学級担任教師のPM式指導類型が学級意識及び学級雰囲気にならぼす効果-数量化理論第Ⅱ類による検討- 教育心理学研究 第24巻 第4号

(注)

問題作成, 統計処理にかかりました河野幸枝氏, 番町小学校の校長先生はじめ, 小学5, 6年生担任の先生方, 対象者の児童の皆様, いろいろお世話になりました。心よりお礼申し上げます。